

概 要

児童によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳科を要とした道徳教育の充実が求められている。本校では、道徳科と各教育活動との関連を別葉に示しているが、どのように関連させれば指導の効果を高めることができるかという共通理解が図られていないため、具体的な手立てが必要である。本研究は、重点的指導の手引となる「道徳ガイド」を作成し活用することを通して、道徳科と各教育活動の関連を意識した道徳教育を学校全体で推進することを目指すものである。

1 主題設定の理由

本校の児童は、気持ちのよい挨拶、返事を身に付けており、何事にも意欲的に取り組むことができる。学習に対しても熱心に取り組む、学力調査では全国平均を上回る結果を残している。学習や学校生活に意欲的に取り組むことが大河原小学校の児童のよさと言える。しかし一方で、周りの雰囲気流される傾向があり、自分の意思で行動することができなかつたり、困難を乗り越えることができなかったりする児童もいる。また、保護者からは、より粘り強い子になってほしい、思いやりのある子に育ってほしいなどと成長を期待する声がある。

以上のような実態を踏まえ、本校は教育目標として「自他の命を大切にし、豊かな人間性と創造性、将来への夢や志をもってたくましく生きる心身ともに健康な児童の育成」を掲げている。この教育目標を踏まえ、道徳教育全体計画では、目指す児童の姿を「豊かな心と正しい判断力を身に付け、より良く生きる子」としている。教育目標を具現化するためには、全教育活動を通じて行う道徳教育と、その要となる道徳科の充実が肝心であると考ええる。

小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（以下、「学習指導要領解説」）の第2章第1節「道徳教育と道徳科」において、「道徳科は、各活動における道徳教育の要として、それらを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させたり統合させたりする役割を果たす。」と述べられている。この要としての役割については、第4章第3節の2「道徳科の特質を生かした計画的・発展的な指導」の中で、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の指導の充実が、道徳科の指導の充実につながることを意味を深く理解し、その要としての重要な役割を再認識して、計画的・発展的な指導を行うようにしなければならない。」とある。これらのことから、道徳科の指導の充実のためには、道徳科が各教育活動における道徳教育の要としての役割を持つことを学校の全教員が認識した上で指導に当たることが重要であると考ええる。

また、学習指導要領解説の第3章第1節内容の基本的性格2の（2）では、重点的指導の工夫が大切であると述べられている。重点的指導とは、「各学年段階で重点化されている内容項目や学校として重点的に指導したい内容項目をその中から選び、教育活動全体を通じた道徳教育において具体的な指導を行うことである。」とされている。これを受け、本校では、重点的に指導したい内容項目（以下、「重点内容項目」）を【A希望と勇気、努力と強い意志】（全学年）【B相互理解、寛容】（中・高学年）【B親切、思いやり】（低学年）【D生命の尊さ】（全学年）と設定している。そして、「特別活動や他の教科との関連を図り、指導の効果を高める」と道徳教育全体計画に明示し、各教育活動における道徳教育と道徳科との関連を別葉に示し、計画的、発展的な指導を目指している。しかし、別葉には各教育活動の中で道徳性を養うための具体的な手立てや、各教育活動で養われた道徳性を道

徳科の授業に生かす手立ては示されていない。そのため、道徳科と各教育活動をどのように関連させれば、指導の効果を高めることができるのかという共通理解が図られていない。これらの課題を解決するため、道徳科と各教育活動との関連について、全教員が共通理解を図りながら指導することができる具体的な手立てが必要だと考える。

そこで本研究では、重点的指導の手引となる「道徳ガイド」を作成する。既存の別葉は、道徳科と各教育活動との関連の全体像を把握することができる。それに対し、「道徳ガイド」は、道徳科と各教育活動の関連について具体的な指導例を示した手引となるものにしたい。学校の全教員が児童の実態に応じて「道徳ガイド」を活用することにより、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育の推進を図ることができると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

重点的指導の手引となる「道徳ガイド」を作成し、活用することで、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進する。

3 研究仮説

重点的指導の手引となる「道徳ガイド」を作成し、活用することにより、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進することができるであろう。

4 研究の対象と方法

4. 1 研究対象

大河原町立大河原小学校の全校児童及び全教員

4. 2 研究方法

- (1) 道徳に関する文献研究及び先行研究による理論研究
- (2) 道徳に関する児童及び教員の実態調査と分析
- (3) 「道徳ガイド」の作成と活用
- (4) 道徳科と各教育活動との関連を意識した実践
- (5) 研究仮説の検証
- (6) 研究のまとめと考察

5 研究の概要

5. 1 研究主題及び副題について

5. 1. 1 「道徳科と各教育活動との関連を意識した」について

学習指導要領解説の第2章第1節「道徳教育と道徳科」では、「各教育活動での道徳教育がその特質に応じて意図的、計画的に推進され、相互に関連が図られるとともに、道徳科において、各教育活動における道徳教育で養われた道徳性が調和的に生かされ、道徳科としての特質が押さえられた学習が計画的、発展的に行われることによって、児童の道徳性は一層豊かに養われていく。」と述べられている。道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目は、道徳科だけでなく、各教育活動において指導されなければならない。その上で、道徳科には、各教育活動では考える機会を得られにくい道徳的価値について補う補充、道徳的価値の意味やそれと自分との関わりについて一層考えを深める深化、道徳的価値に関わる諸事象を、捉え直したり発展させたりして児童に新たな感じ方や考え方を生み出す統合といった「要としての役割」がある。各教育活動における道徳教育は、その特質に応じて意図的、計画的に道徳性を養う実践的な指導である。これに対し道徳科は、児童の内面を育てる教科であると言える。各教育活動において養われた道徳性を道徳科の授業に生かしたり、道徳科で養

われた道徳性をその後の各教育活動に生かしたりする連続性のある学習を目指したい。

そこで、本研究では「道徳科と各教育活動との関連」を「道徳性を養うため、意図的、計画的に指導された各教育活動において養われた道徳性を道徳科の授業に生かし、さらに、道徳科の授業で養われた道徳性を生かして各教育活動に取り組むことができるようになるというつながり」と捉える（図1）。

このように「道徳科と各教育活動との関連」を踏まえた指導をすることで、児童の道徳性が一層豊かに養われていく。よって、教員は道徳科と各教育活動との関連を具体的に押さえ、児童が考えたことや感じたことを次の活動、次の授業につなげ、連続性のある学びをコーディネートしていく必要があると考える。

そこで、本研究では「関連を意識した」を、「教員が、道徳科と各教育活動との関連を具体的に押さえ、児童の考えたことや感じたことを道徳科と各教育活動で相互に生かし合えるようにするための手立てを持って指導に当たること」と捉える。

5. 1. 2 「重点的指導」について

本校では、「重点的指導」を、「学校の重点内容項目を道徳科と各教育活動との関連を意識して指導すること」と押さえ、重点内容項目を前述のとおり設定している（表1）。

5. 1. 3 「『道徳ガイド』」について

学習指導要領の第3章第3の1において、「各学校においては、道徳教育の全体計画に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮しながら、道徳科の年間指導計画を作成するものとする。」としている。これを受け、本校では、道徳科の年間指導計画と、各教育活動との関連を示した別葉を整備している。本研究で作成する「道徳ガイド」は、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進できるようにするために、別葉を更に具体化した重点的指導の手引である。

5. 1. 4 「作成と活用」について

「道徳ガイド」は、本研究で原案を示すが、年度ごとに道徳教育推進教師を中心に道徳部の教員で原案を基に作成していききたい。そして、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を計画的に推進していくために、年度始めに「道徳ガイド」の活用について共通理解を図る場を、学校全体及び学年部で持ちたいと考えている。

活用に当たっては、「道徳ガイド」に示した声掛け例や発問例に、教員が気付いたことや効果的な指導例などを朱書きしていくようにしたい。本研究において「作成と活用」としたのは、作成された「道徳ガイド」をそのまま使用するだけでなく、常に実践を通してガイドを見直し、改善を図りたいと考えたからである。PDCAサイクルを意識することを通して、より実効性のあるガイドにしていきたいと考える。

5. 2 実態調査

5. 2. 1 調査のねらい

(1) 教員に対し、道徳科の指導に関わることと、道徳教育としての指導に関わることの2点について、実態を把握し、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育の推進における課題を明らかにするとともに、「道徳ガイド」の有効性の分析に生かす。

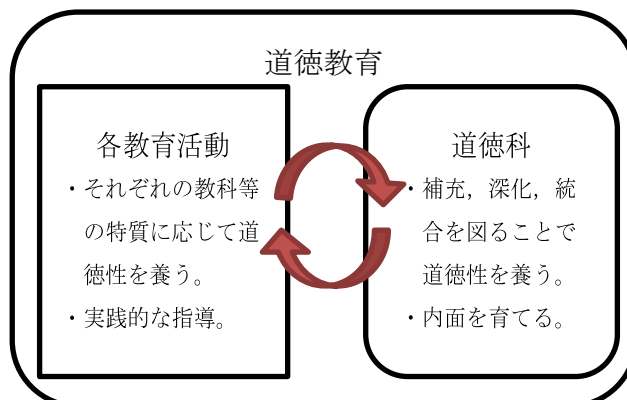


図1 各教育活動と道徳科の関連

表1 各学年の重点内容項目

視点	1, 2 学年	3, 4 学年	5, 6 学年
A	「希望と勇気, 努力と強い意志」		
B	「親切, 思いやり」	「相互理解, 寛容」	
D	「生命の尊さ」		

(2) 児童に対し、道徳科の学習に関することと、道徳科と学校の各教育活動との関連についての実態を調査して把握し、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育の推進における課題を明らかにするとともに、その成果の分析に生かす。

5. 2. 2 調査対象

大河原町立大河原小学校の全校児童及び全教員

5. 2. 3 調査期日

平成30年6月上旬及び平成30年11月下旬

5. 2. 4 調査の方法及び内容

(1) 調査回数 2回

(2) 調査方法 質問紙法（選択肢式・記述式）

5. 2. 5 調査結果及び分析（1回目）

平成30年6月に実施した1回目の実態調査の結果は次のとおりである。

教員を対象にした実態調査では、「道徳科の授業において、児童が、各教科の授業や学校行事、普段の生活等での体験を基にして考えていると感ずることがある」という設問と「児童にとって道徳科で学習したことが、各教科の授業や学校行事、普段の生活等に生かされていると感ずる」という設問に対する「よくある」という回答を比較すると、各教育活動の体験が道徳科に生かされていると感ずている教員より、道徳科の学習が各教育活動に生かされていると感ずている教員の方が少ない結果となった。このことから、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進する上で、道徳科の学習を各教育活動の実践につなげていくという視点を重視していく必要があると考える（図2）。

また、「重点的に指導したい内容項目を指導するに当たり、どのような手立てを考えているか、あるいは実践してきたか」という設問について①「道徳科における手立て」②「各教育活動における手立て」③「道徳科と各教育活動を関連させる手立て」の3つに分けて回答を求めた。①、②に対しては、経験年数の多い教員ほど、様々な手立てを挙げていた。「道徳科と各教育活動を関連させる手立てを講じてきたか」という設問に関しては、「手立てを講じてこなかった」という回答や無回答が見られた。しかし、③に手立てなしと答えた教員が①や②に、道徳科と各教育活動との関連を意識した手立てを書いている場合も見られた（表2）。このことから、多くの教員が児童の実態に応じて手立てを講じているが、道徳科と各教育活動とを関連付けようとする意識を持たずに指導を行っているのではないかと推測した。したがって、道徳科と各教育活動との関連を意識した指導について全教員で共通理解を図ることを通して、意識を更に高めたり、無意識で行っていたものを意識させたりする必要があると考える。

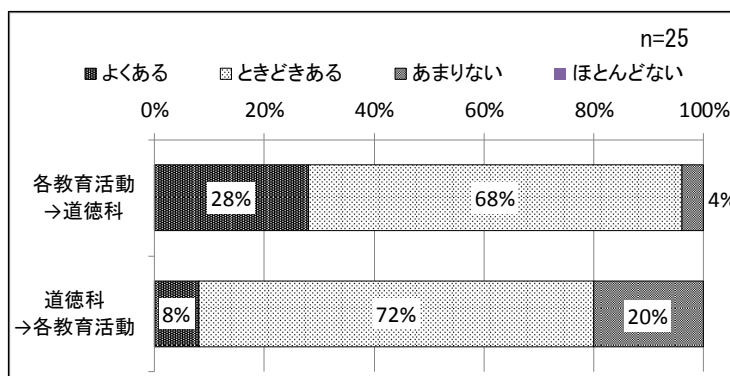


図2 道徳科と各教育活動との関連に対する児童の意識（教員の見立て）

表2 道徳科と各教育活動を関連させる手立て（教員）

記入あり	14名
手立てなし等	11名
主な回答（記述式） ・その他の教育活動を行う際、めあてを持たせ、めあてに即した振り返りをさせる。 ・実体験と関連付けさせる。 ・日常の生活、学級指導、行事等（生徒指導）での声掛けが大事。 ・導入時での自身の体験を振り返らせる活動。 ・学校での生活を思い浮かばせる場を作る。国語の物語教材と道徳的価値の関係を意識して行うこともある。 ・挿絵を教室や廊下に掲示し、授業で捉えさせた価値を日常的に振り返らせることができるようにする。 ・導入で行事のことを振り返らせる。既習の教材の内容で学んだことを取り上げる。	

児童を対象とした実態調査では、「道徳の学習が好きか」という設問に対して、学年が上がるにしたがい、「とても好き」と答える児童が減り、「まあまあ好き」と答える児童が増え、「あまり好きではない」と回答する児童が多くなるという結果が得られた（図3）。

高学年の担任に調査結果について知らせ、普段の道徳科の授業の様子を聞いたところ、「道徳の学習になると、教師が何を言ってほしいかを探るような様子が見られる」「他の教科では自分の考えを発表する児童が、道徳のときは恥ずかしがって発表をしなくなる」などの話を複数の教員から聞くことができた。高学年の児童の中には、道徳科は、「教材どおりの正解を探す授業」「自分の気持ちを発表しなければならない恥ずかしい時間」と捉えている児童がいるのではないかと考えられる。

「道徳科で学習したことが、各教育活動に役立って（生かされて）いるか」という設問に対しては、低、中学年に比べると、高学年で「あまりない」「ほとんどない」と回答した児童の割合が高く「ときどきある」「よくある」と回答した児童の割合が低いという結果が得られた（図4）。このことから、道徳科は他教科とは異なり内面を育てるという教科であることを、教師だけでなく児童も十分理解して授業に臨むことが必要であると考え。答えが一つではない問題に対して、友達と話し合うような授業を展開し、問題に対して本音で語り合うよさを体験させていく必要があると考える。

以上のことから、道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を全教員で推進し、児童に道徳科の授業の楽しさを味わわせ、児童自身が成長を感じられるよう指導していく必要があると考える。

5. 3 指導対策

5. 3. 1 「道徳ガイド」の作成と活用

(1) 「道徳ガイド」の作成

「道徳ガイド」には、本校に既存している道徳教育全体計画、別葉、そして、本研究で作成する「重点的指導の手引」「ワークシート」「道徳通信」とをじ込む（図5）。本研究の柱となる「重点的指導の手引」は全学年分をとじ込む。これは、児童の発達の段階における道徳的価値の発展性を押さえて指導するためである。

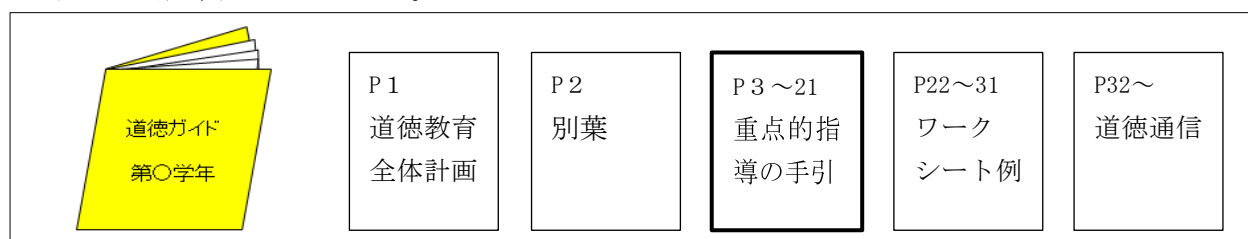


図5 道徳ガイドの内容

(2) 「重点的指導の手引」の作成

「重点的指導の手引」（以下、「手引」）は1つの重点内容項目について1ページにまとめる。その内容は大きく2つの部分で構成する。

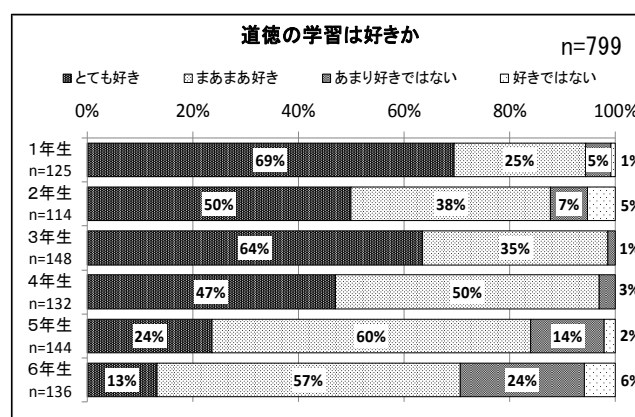


図3 道徳の学習に対する意識（児童）

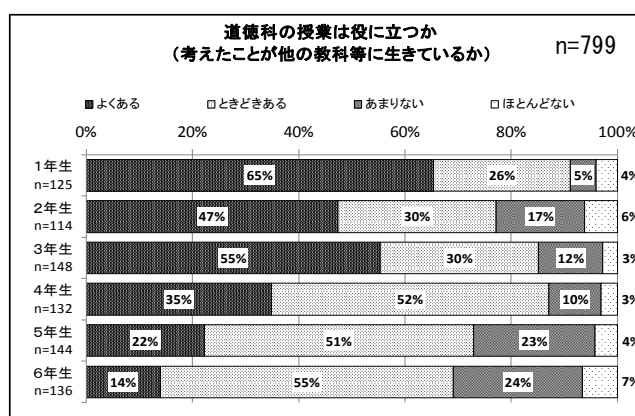


図4 道徳科の授業の教育活動との関連に対する意識（児童）

紙面の左側には、各教育活動における実践的な指導について示した。重点内容項目を指導するに当たり、児童が道徳的価値の意義や大切さをより自分事として考えられるような学校行事や各教科の授業を選び、指導する時系列に沿って記載する。教員のイラストがある枠には、それぞれの教育活動について内容項目を意識した声掛け、目標の設定や振り返り、学習活動などについて例示をした（「○」で示す）。内容項目を意識した声掛けにより、各教育活動において児童の道徳性を意図的、計画的に養うことができると考える。目標の設定や振り返りについては、児童の考えたことや感じたことがその後の道徳科の授業に生かされるよう投げ掛け方を工夫する。例えば、「希望と勇気、努力と強い意志」の内容項目に関わる目標設定であれば、目標だけでなく、どのような練習をしたいかを具体的に考えさせることで、自分の努力について振り返ることができるようにする。さらに、児童のイラストがある吹き出しには、道徳科と各教育活動の関連を意識した指導により、目指す児童の姿に近づいた振り返りの例を示している。

第2学年 A 希望と勇気、努力と強い意志	
自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと。	
各教育活動（実践的な指導）	指導例 道徳科（内面を育てる） 発問例
4～5月 運動会練習と運動会（体育科、学行） ○目標と振り返り →練習への取り組み方 ○声掛け →最後まで全力で走ろう →たくさんの人が応援していますよ	7月 さかあがりできたよ ◎導入 ・運動会で頑張ったことを発表しましょう。 ・水泳記録会に向けての目標を発表しましょう。 ◎展開 ・主人公はどんな気持ちで夏休みも練習したのか。 ◎終末 ・できなかったことができるようになったときの気持ちをシートに書きましょう。 ・算数の計算ができるようになってうれしかった。 ・もっと難しい問題に挑戦したい。 ・そんな経験はなかった。
6～9月 水遊びと水泳記録会（体育科） ○目標と振り返り →練習への取り組み方 →できた（できなかった）ときの気持ち ○声掛け →何度も練習しよう	

図6 重点的指導の手引の一例

紙面の右側には内容項目を指導する道徳科の指導について、教材ごとに1つの枠で示した。それぞれの教材について、主な発問例を示し、導入の発問は指導時期の近い教育活動の振り返りが生かされるようにし、児童にも道徳科と各教育活動との関連を意識させていく。また、道徳的価値についての理解を深めさせる発問に対する児童の考えを、後述するワークシートに記入させ、次の活動へのつながりを意識できるようにする。さらに、児童のイラストがある吹き出しには、授業中に予想される児童の反応例を示した。ここに示したような道徳的価値についての多面的・多角的な児童の考えが、次の教育活動に生かされたと考える。

紙面の左側と右側の間には矢印を記載した。これは、道徳科と各教育活動で考えたことや感じたことが互いに生かされ、児童の道徳性が養われていくイメージを表したものである（図6）。矢印は2種類ある。右向きの矢印（⇒）は、児童に教育活動の目標設定や振り返り、活動中に考えたことや感じたことなどを「思い出そう」と、道徳科の導入や展開で投げ掛け、各教育活動で養われた道徳性を生かす関連を表している。左向きの矢印（⇐）は、道徳科の授業で養った道徳性は各教育活動に「つながる」ことに気付かせ、実践に生かす関連を表している。

さらに、紙面の全体については、実践して気付いたことを手引の中に教員が朱書きできるようスペースを空けるようにした。

さらに、紙面の全体については、実践して気付いたことを手引の中に教員が朱書きできるようスペースを空けるようにした。

(3) 「道徳ガイド」の活用

「道徳ガイド」は、教科書とともに使い、教材研究や各教育活動、道徳科の指導に生かす。

実践の場面では、教員が「手引」の内容を参考にし、各教育活動における実践的な指導を行い、そこで養われた道徳性を生かして道徳科の授業を実践していく。実践して気付いたことを朱書きし、よりよい「手引」になるよう改善を図っていく。

(4) ワークシートの活用

「手引」を活用し、道徳科と各教育活動との関連を意識した指導を進めるための手立てとして、ワークシートを活用する（図7）。ワークシート

第2学年道徳科 学習のあしあと「自分がやるべきことをしっかりと」	
組 番 名前	
4～5月 運動会練習と運動会 活動がイメージできる写真	7月
6～9月 水遊びと水泳記録会 活動がイメージできる写真	9月
10月 音楽発表会練習と音楽発表会	

図7 ワークシート「あしあと」の一例

(5) 「道徳通信」による共通理解

通信の内容には、道徳教育における道徳科の役割「補充、深化、統合」の捉えや、重点内容項目を指導する際の要点などについて学習指導要領解説を基に簡潔にまとめ、示していく。教員が教材研究をする際の参考になるようまとめていく。

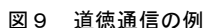
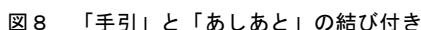
また、「手引」の活用の仕方についても掲載
する。具体的には、重点的指導を進めるための学年会の持ち方、見直し朱書きをする時期、見直しをする際の視点、次年度に向けて修正を加える時期などについて明記する。

(1) 道徳科の授業実践

① 各教育活動の体験を想起させる導入の工夫

導入では、これまでの教育活動で考えたことや感じたことを振り返らせ、価値への方向付けを図る。例えば「希望と勇気、努力と強い意志」の授業の導入では「運動会に向けての練習で一番大変だったことは何ですか」と発問し想起させる。そのことにより、児童に「あきらめずにやり抜く」という価値を意識付ける。その際、学校行事の事前指導で児童が立てた目標や振り返りの中から、道徳的価値に関わるものを教員が意図的に集約して紹介するなどの手立ても考えられる。

展開では、これまでの教育活動で考えたことや感じたことが生かされるよう留意していく。児



児童が道徳的価値を自分が考えたことや感じたことを照らして考えられるような発問を投げ掛けていく。児童の実態や発達段階、扱う内容項目や教材、授業展開などによって、4種類の発問を使い分けていくことが効果的なのではないかと考える（表3）。

表3 4種類の発問

発問の種類	発問の意図	具体例
共感的発問	登場人物の気持ちや考え方に共感し、想像する。	～はどんな気持ちか。
分析的発問	登場人物の気持ちを客観的に考える。	～したのはなぜか。
投影的発問	登場人物を自分に置き換えて考える。	自分だったらどうか。
批判的発問	登場人物の考え方などについて自分の考えを持つ。	～をどう思うか。

③ 各教育活動における実践意欲を高める終末の工夫

終末では、学習の中で児童が考えたことを、その後の教育活動への実践意欲につなげるための手立てを講じていく。ワークシート「あしあと」を活用し、授業の振り返りと今後の実践への意欲付けを同時に行うことで、道徳科の学習が各教育活動に生かされることを児童にも実感させていく。このことにより、実態調査の結果から明らかになった「教員は道徳科が各教育活動に生かされていると感じることが少ない」ことや「高学年の児童は道徳科の授業で考えたことが、他の教育活動等に生きると捉えていることが少ない」という課題の解決にもつながると考える。

(2) 各教育活動での実践における手立て

道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進するため、各教育活動の実践において、以下の視点から手立てを講じていく。

① 道徳的価値を意識させる声掛け

各教育活動では、道徳的価値を児童に意識付けするという意図を持って声掛けを行う。例えば「希望と勇気、努力と強い意志」は学習指導要領解説によると「自分の目標をもって、勤勉に、くじけず努力し、自分を向上させることに関する内容項目である。」とある。活動に取り組む際、児童に「頑張ろう」と声掛けをするよりも、「〇〇を目指して頑張ろう」と目標を意識させたり「あきらめずに頑張ろう」とくじけず努力することの大切さを伝えたりすることで、道徳的価値をより意識させることができる。教員が意図を持った声掛けを続けることが、各教育活動を通して児童に道徳的価値の大切さや実行することの難しさなどを感じさせることにつながる。このように道徳教育を推進することで、道徳科の授業において児童が道徳的価値を自分の経験やそのときの考え方、感じ方と照らし合わせながら考えを深めることにつながると思う。

また、道徳科で考えた、道徳的価値の大切さや、実現することの困難さ、人による感じ方の違いなどを各教育活動に取り組む際に話題として取り上げたり、道徳科の授業での児童の発言をそのまま声掛けの言葉にしたりすることで、道徳科と各教育活動の関連を意識させながら今後の活動に臨ませることができると考える。

② 道徳的価値を意識させる目標設定と振り返り

各教育活動の中でも、目標の設定と振り返りをする場合に留意する点があると考えている。例えば、児童に持久走記録会の目標を設定させる際、単に「目標を立てよう」と投げ掛けると、「1位になりたい」「去年より順位を上げたい」などの目標が予想される。しかし、教師が道徳的価値「希望と勇気、努力と強い意志」を意識して、「練習に対してどのように取り組むか」と投げ掛けることで、児童は、「毎日練習を続けたい」「つらくてもあきらめずに走りたい」などの目標を立てることができると考える。また、振り返りについても、「記録会を振り返ろう」ではなく、「練習への取組も合わせて記録会を振り返ろう」と投げ掛ける。すると児童は、「途中であきらめそうになったけど最後まで走れてよかった」「自分の目標に向かって毎日の練習を続けることができた」など道徳的価値を意識した振り返りができる。このように、児童が道徳的価値を意識できるような目標設定や振り返りのさせ方を工夫する。

5. 4 授業実践と考察

5. 4. 1 道徳科の授業実践と考察

(1) 第1回授業実践

7月17日（火）2校時目 第2学年2組 男13名 女15名 計28名
 教材名 「さかあがりできたよ」東京書籍 あたらしいどうとく2年
 授業者 大河原町立大河原小学校 櫻庭 寛法

本授業は、本校の重点内容項目の1つである「A希望と勇気、努力と強い意志」の学習である。運動会への取組や、体育の水遊びの学習を関連させて指導を行った（図10）。

導入では、体育科で取り組んでいる水泳記録会の目標を取り上げた。児童にとって身近で想起しやすい話題を取り上げたことで、「目標を達成するのは難しそう」「できないなあ」と思ってしまうなどという反応が見られた。物事をやり抜くことの難しさを感じさせることで、価値への方向付けを行うことができた。

展開では、登場人物に共感できる発問「どんなことを考えて練習をしていたか」を投げ掛けた。児童からは、「できるようになりたい」などの目標に向かう反応、「お母さんや先生に見せたい」などの周りの人の支えに気付く反応が多く見られた。しかし、「暑くて大変」「難しくてあきらめたい」といった、道徳的価値を実現することの難しさについての反応は、引き出すことができなかった。その要因として、「どんなことを考えて練習をしていたか」という発問を、練習に取り組む動機を考えるように受け取る児童が多かったことが考えられる。また、友達の逆上がりを見たときの登場人物の気持ちを考えることや、練習に取り組んだ期間の長さなどの場面の把握を十分にできないまま発問したことが原因であると考えられる。

終末では、「あしあと」を使い学習を振り返り、今後の教育活動への見通しを持たせた。「できなかったことができるようになったときの気持ち」を問い掛けたところ、児童からは「何かができるとうれしい気持ちになる」「また褒められたい気持ちになる」などといった反応が見られた。そして最後に、「みんなが考えたような気持ちをこれからも味わえるといいですね」と励ましの言葉を掛け、今後の教育活動に対する実践意欲を高めた。

(2) 第2回授業実践

7月17日（火）3校時目 第2学年1組 男12名 女16名 計28名
 教材名 「さかあがりできたよ」東京書籍 あたらしいどうとく2年
 授業者 大河原町立大河原小学校 佐藤 毅

第1回授業実践と同じ意図で、実践した。

前時の反省を生かし、展開では登場人物が逆上がりの練習を始めるまでの状況や心情を丁寧に確認した上で、中心発問を「練習していたときの気持ちを考えよう」と改善した。この発問により、目標に向かう反応、周囲の支えに気付く反応の他に、「できないかもしれない」「難しい」など心の弱さに触れた反応も見られ、児童の多様な考えを引き出すことができた。

発問の言葉や、そこに至るまでの展開が違うことで、児童の考えの深まり方にも大きな違いが表れることが分かった。道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進するためには、1単位時間の道徳科の授業を充実させることが重要であることを再確認することができた。改善した発問は「手引」に朱書きをし、次年度に引き継いでいきたい。

参観者からは、「『手引』に示された矢印により、関連を図ろうとする意識が高まった。」「各教育活動と道徳科の授業が時系列に示されていることで見通しが持てた。」などの意見が得られた。

「手引」が道徳科と各教育活動との関連を意識するために効果的であったと考えられる。

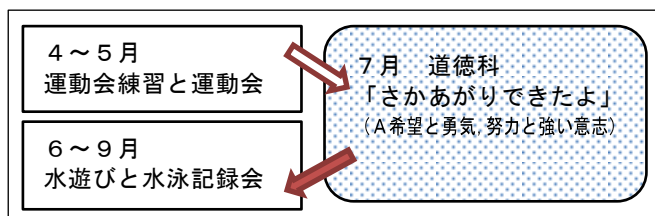


図10 第1, 2回授業実践における道徳科と各教育活動との関連

(3) 第3回授業実践

8月30日(木) 3, 4校時目 第2学年 男51名 女62名 計113名

単元名 「水遊び」(体育科)

授業者 大河原町立大河原小学校 高野 晴美, 佐藤 毅, 高橋 駿人, 山崎 綾美,
櫻庭 寛法

重点内容項目である「希望と勇気, 努力と強い意志」に関連した体育科の指導を行った(図11)。事前の打合せでは, 以下の2点について短時間で説明し, 授業者間で共通理解を図った。

① 今日の学習は, 第1, 2回授業実践を受け, 重点内容項目「希望と勇気, 努力と強い意志」と関連すること。

② 児童には自分の課題を意識させた上で, 努力した充実感を味わえる賞賛, 努力をするために見通しが持てる技術的な指導, あきらめない心を勇気付ける声掛けを心掛けること。

実践中は, 「〇〇さん, 足が着かなかったね, すごい」「さっき自分が立ってしまった所より少しだけ向こうに行こう」等, それぞれの教員が道徳的価値を意識して声掛けをする様子が見られた。また, 児童も, 友達を賞賛したり, うれしそうにほほえんだりする様子が見られた。さらに, 「〇〇さん見ていて。」とできたことを喜ぶ様子や「私, 泳げるようになった。」と充実感を感じている様子も見られた。「手引」を活用することで, 道徳科と各教育活動との関連を意識した実践につながったのではないかと考える。

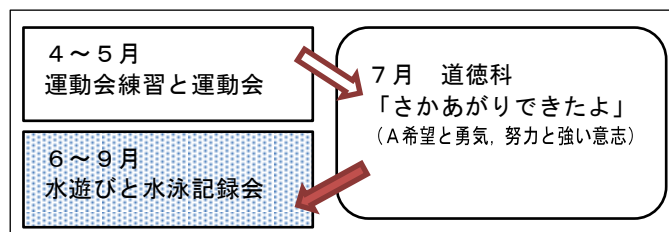


図11 第3回授業実践における道徳科と各教育活動との関連

(4) 第4回授業実践

10月10日(水) 2校時目 第4学年 男15名 女18名 計33名

単元名 感想を伝え合おう「ごんぎつね」 東京書籍 小学校国語4年

授業者 大河原町立大河原小学校 櫻庭 寛法

重点内容項目である「生命の尊さ」に関連した国語科の指導を行った(図12)。

本時の目標は, 「物語を通読して内容の大体を捉え, 感想を伝え合おう」であった。本時の反応として, ごんが火縄銃で撃たれる場面を取り上げ, ごんをふびんに思ったり, 兵十を責めたりするような発言が多いと予想した。そこで, 児童の「生命の尊さ」についての多様な価値理解を共感的に受け止め, 認めることで道徳的価値を意識させたいと考え実践した。

実践中の児童の反応として, 「青いけむりが, まだつつから・・・の部分がとても切なく感じました」「ごんおまえだったのか・・・の部分から, よい話だけど複雑な思いがありました」など, ごんの死に悲しみを感ずる児童が多く見られた。教師が全ての考えを共感的に受け止め認めたことで, 児童は安心して感想を発表した。友達の発表を聞く児童も, 発表に耳を傾け, うなずきながら聞いていた。これらの様子から, 感想を伝え合う学習を通して, 生命の尊さという道徳的価値の大切さを再認識することができたと考える。

また, 本文を朗読して聞かせた後, 物語の結末の悲しさに泣き出してしまう児童がいた。その児童だけでなく, 朗読の後には教室が静けさに包まれ, 児童からは「えっ, 死んじゃったってこと」「本当にこういう結末なの」とごんの死を受け止めきれないような反応が見られた。生命の尊さという道徳的価値についての理解は, これまでの生活や道徳科の授業を通して育まれてきていることが分かった。このことから, 次に行う道徳科の実践は「補充」の内容ではなく, 「深化」や「統合」を

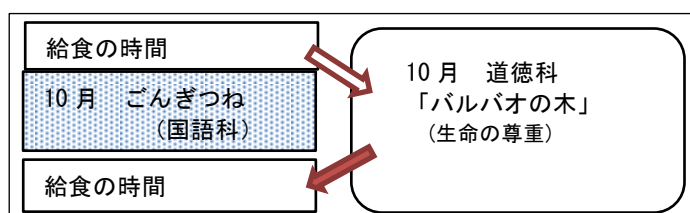


図12 第4回授業実践における道徳科と各教育活動との関連

図ることができるような授業が効果的であると考えた。

(5) 第5回授業実践

10月18日（木）5校時目 第4学年 男15名 女18名 計33名
 教材名 「バルバオの木」東京書籍 新しいどうとく4年
 授業者 大河原町立大河原小学校 櫻庭 寛法

本授業は、本校の重点内容項目の1つである「D生命の尊さ」の学習である。給食の時間や国語科の物語文の学習を関連させて指導を行った（図13）。

導入では、給食の時間を思い出させ、「食べることと生命の関わりについて考えたことはありますか」と問い掛けた。児童にとって食事は日常的であるが、生命との関わりで考えたことのある児童は少ないことが確認できた。このことにより、本時で学習する道徳的価値について深く考えていこうという意欲付けを行うことができた。

展開では、動物たちの気持ちを想像させたり分析させたりし、その動物たちに自分の考えを投影させて発表して考えることができるよう、ゾウの視点から「バルバオの木の幹や枝を食べながら、ゾウたちはどのようなことに気付いたのでしょう」と問い掛けた。児童からは、「ありがとう、無駄にしないよ」「僕たちのために命をくれたなら、感謝してこれからも生きていこう」などの、感謝の気持ちを感じている考えが出された。そして、「バルバオは私たちに食べさせてくれた。引き継いだ命を大切にしたい」「バルバオの木を見習って次の世代につなげよう」など、受け継がれる命のたくましさという道徳的価値に迫る考えも出され、学級で共有することができた。

終末では、「あしあと」を使い学習を振り返り、今後の教育活動への見通しを持たせた。その上で、「食えることと命の関わりについて自分はどうか考えましたか」と問い掛けると、「食べものから命をもらっているから、自分の命を大切にしたい」「食べないと生きていけない」「生きることは食えること、だから食えることは幸せ」など多様な考えが出された。ペア、グループ、全体で共有した上で「あしあと」を見せ、「生命について考える機会はたくさんあるから、今日のように考えてみてほしい」と投げ掛けて授業を終えた。

本学級では、その日の給食の時間に道徳科の授業の話題が出された。「食えることは命をもらっているんだよ」などと友達同士で声を掛け合う姿があった。授業で考えたことを学校生活の中で想起している様子から、「手引」を基にした指導によって、児童にも道徳科と各教育活動の関連を意識させることができたのではないかと考える。

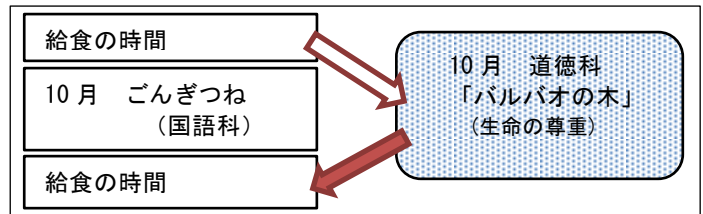


図13 第5回授業実践における道徳科と各教育活動との関連

6 研究のまとめ

6. 1 研究の成果

6. 1. 1 道徳科の授業が各教育活動に生かされていると感じている教員の増加

11月に2回目の実態調査を行ったところ、6月に比べ各教育活動の体験が道徳科に生かされていると感じている教員及び、道徳科の学習が各教育活動に生かされていると感じている教員が増えた（図14）。特に、道徳科の学習が各教育活動に「よく生かされている」「ときどきいかされている」と感じている教員が、80%から92%に

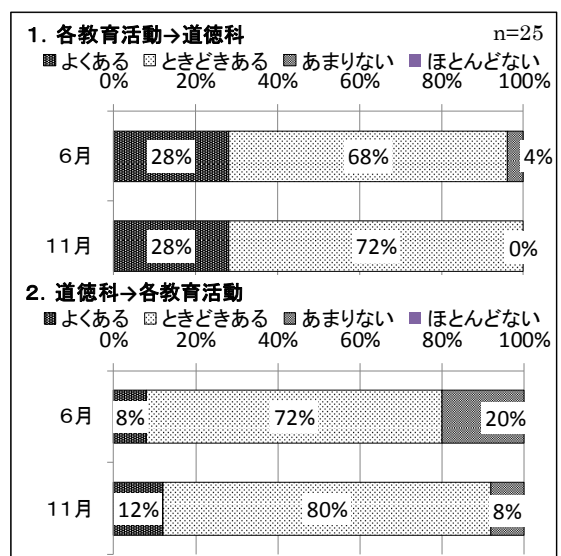


図14 道徳科と各教育活動との関連に対する児童の意識（教員の見立て）6月と11月の比較

増えたことから、教員に道徳科の学習を各教育活動に生かしていこうとする意識が高まったと考える。

6. 1. 2 道徳科と学教育活動とを関連させる具体的な手立てを挙げる教員の増加

11月の実態調査では、道徳科と各教育活動とを関連させる具体的な手立てを挙げる教員が増えた（表4）。「道徳ガイド」を配布し、「手引」を基にして各学年の道徳教育について情報交換を行ってきた。その中で、道徳科と各教育活動との関連を意識した実践を報告し合ってきたことが、このような成果につながったと考えられる。

6. 1. 3 ワークシート「あしあと」が道徳教育を推進

11月の実態調査の中で、ワークシート「あしあと」についても「道徳科と各教育活動とを関連させる手立てとして使っている」という回答を得ることができた。さらに、詳細について口頭で聞いたところ「『あしあと』は年度末の評価にも生かせそうだ」という意見を聞くことができた。それぞれの学年で、「あしあと」を作成し、実践する姿が見られている。「あしあと」が道徳科と各教育活動との関連を意識した道徳教育を推進する一助になったと考える。

6. 2 今後の課題

6. 2. 1 「重点的指導の手引」の見直し

道徳科と各教育活動との関連を更に具体的に示す必要のある部分や、関連させるのは難しい部分があることが分かった。指導内容や指導時期について、道徳部を中心に見直し、改善を図っていく。

6. 2. 2 ワークシート「あしあと」の活用の見直し

3つの重点内容項目ごとに、ワークシート「あしあと」を活用しているが、数人の教員から「3種類に取り組みさせて蓄積していくのは、児童にとって負担が大きくなるのではないか」という話も出ている。「あしあと」の作成、活用についての見直しと同時に、「あしあと」がどのように児童の成長に資することができ、評価に関してどの程度有効に活用できるかについて、明らかにしていく。

6. 2. 3 1時間単位の道徳科の授業の充実

11月の児童の実態調査では、道徳科に関する意識は大きく変わらなかった。「道徳科で学習したことが、各教育活動に役立って（生かされて）いるか」という設問に対して、6年生の回答は「ある」と捉えている児童が減り、「ない」と捉えている児童が増えた。高学年の児童にとって楽しみな道徳科の授業づくりを目指し、道徳科と各教育活動との関連を児童も意識できるような指導の在り方を模索していく。

表4 道徳科と各教育活動とを関連させる手立て（教員）11月

記入あり	18名
手立てなし等	7名
主な回答（記述式） ・給食を配膳する時に、道徳教材「大好きなフルーツポンチ」を想起させた。 ・道徳教材「うかんだうかんだ」と体育の水遊びの学習を関連させた。 ・持久走記録会では、他の子との比較ではなく、過去の自分の記録と比べてどうだったかと考えさせた。 ・道徳科の導入で行事や普段の生活、授業の体験を関連付けた話をした。 ・道徳科の学習を基に、全校の前で話す場面に勇気を持って挑戦させていく。 ・道徳科の授業で取り上げる場面と似ている実生活の場면을想起させる。 ・「あしあと」を活用して関連させる。 ・理科の学習と「生命の尊さ」を関連させる。 ・生活科の単元「生き物を飼おう」をD生命の尊さと結び付けた。	

主な参考文献

- | | |
|---|-----------------|
| [1] 文部科学省：「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」 | 2018 |
| [2] 石巻市立大街道小学校：「平成28年度宮城県教育委員会指定『豊かな心を育てる研究指定校事業』公開研究会」 | 石巻市立大街道小学校 2017 |
| [3] 赤堀博行編：「これからの道徳教育と『道徳科』の展望」 | 東洋館出版社 2017 |
| [4] 押谷由夫著：「総合単元的道徳学習論の提唱—構想と展開」 | 文溪堂 1995 |